

昭和11年、「二・二六事件」

があつた年である。九段坂を行進する反乱軍の写真が残っている。「交通遮断」の貼り紙と兵士の銃が緊迫した空気を伝えて

いる。雪がしんしんと降り続いた朝であつたという。3日後には戒厳令が敷かれ、日本は戦時

体制へと突入していく。グロチックといわれた「阿部定事件」

もこの年に起こっている。もちろん、「二・二六事件」や「阿部定事件」を書くつもりはな

いが、時代のバックにはふたつの事件があるのは確かである。

昔、ある人がいった。女には

「飛んでる女」「飛べない女」

「とんでもない女」がいる。わたしはとんでもない女には会つ

たことがない。ラッキーな人生

それが次々と7人もの喪服の女

主人が死んだ。自殺説もあるが

殺されたときさやかれる。寂しい

通夜である。近所の人は真面目

で温厚なこの主人には身寄り

も親戚もなかったのかとうわさ

する。降り積もる雪。銀世界で

ある。そこに女の客が訪れる。

それも次々と7人もの喪服の女

人がそんなに艶福家だったの

か」。近所の人は「人は死んで

みないとわからない」とうわさ

する。7人の女は復讐を誓う。

武器は美貌と色仕掛けと知恵で

ある。「でも、ほんとに好きだ

つたのは、あなただけです」と

追憶する。「また、あの女のう

二・二六と阿部定

だったのか、無神経だったのか。

「追憶—七人の女詐欺師—」に

は、7人のとんでもない女が登場

する。阿部定は、誤解を恐れ

ずに言えば、ある意味、かわい

い「飛べない女」だったのかも

しれない。

粗筋はこうである。卸問屋の

の客である。洋装や和装の違い

はあっても、7人とも喪服であ

る。

卸問屋の主人は、軍や悪徳商

人と結託することを嫌がり殺さ

れたとうわさも持ち上がる。

7人の女は卸問屋の主人とはそ

れぞれに因縁があつた。「この

そが始まった。戦争だ」「戦争」

「ああ、女のうそで始まるのが

戦争だ」

阿部定も「好きになるのは一

生に1人でいい」とまでいいき

っている。阿部定は、当時の閉

塞した軍国日本の横っ腹に風穴

をあけた「世直し大明神」だと

いう。号外を含めた大量の阿部定報道は、大衆の目を国政から

そらせるための軍部の情報操作

だったという説も根強い。その

時代に7人の女が手練手管で軍

と悪徳商人に女の武器で復讐を

するのである。詳しい内容はこ

れからであるが、二・二六時代の

の軍歌や流行歌がふんだんに流

れるはずである。

わたしの好きな映画監督に鈴木

木清順がいる。ひと味違った日

活映画を撮った監督である。こ

の人の作品に「けんかえれじい」

がある。主人公の学生南部麒六

が、転校する先々でけんかに明

け暮れる話である。行きつけの

カフェで麒六をじっと見ている

鋭い目の男がいる。
(松浦市出身)